【ねがいましては】

令和５年２月１４日　　*KYOWA SCHOOL*
第３８９号

「味方と応援者」

読売新聞夕刊の連載小説「風に立つ」に胸わくわくさせられるこのごろです。２月１４日、第２４４話に「そうだ！」と思わせる表現がありましたので紹介させていただきます。

『応援しているスポーツ選手が負けると責めるやつがいるけれど、勝手に期待して自分の望んだ結果が出ないと怒るなんて、俺から言わせれば身勝手だ。でも、その人が自分が望んだ結果を出せなかったとしても、寄り添い支え続ける人がいる。それが味方だ。今のあなたは応援者だ。親っていうのは、子供の一番の味方であるべきなんじゃないんですか』

ここで次回へ・・・となります。

この表現、まさに私が感じているものとピタリ重なりました。この小説はやがて出版されると思いますが、とても楽しみです。「味方」そうなんです。勝っても負けてもその人のそばにいてあげられる存在です。体がそばにいるだけではなく、大切なのは「こころ」がとなりにいることです。

親は『育てる』という語彙をどのようにとらえているのか。受け取り方は多くあるはずです。健康な体へと成長できるよう、毎回の食事では同じ味が続かぬよう、栄養バランスが狂わぬよう献立を考えキッチンに立っていらっしゃることと思います。そして、家族の表情に「おいしい」と笑みが溢れる・・・これが一番の楽しみ・・・育てる満足感。

そこで「待った」がかかる瞬間があります。「キラーイ」発言。せっかく腕によりをかけ苦心の末、仕事の疲れを押しのけて作った作品に「キラーイ」・・・カチン！・・・ときたら、これ応援者。自らの期待に結果が出なかった末の「イラッ」です。どちらに非があったのか。この後の親子間の会話に解決の糸口が隠されているような気がします。お父さんがそっとやってきて、何やらぼそぼそと・・・。そして「さっきはごめんなさい」・・・。これぞ家族の鏡のシーン、とはうまくいかないのが世の常だと思います。

全く同じ世界が「成績」です。地元でもトップクラスの授業料を誇る、しかもどのスタッフも有名国立大学出身者。それを看板とする進学塾へ颯爽と通ったが・・・結果は↓。高額授業料と比例して成績も「高」と相成ったか？

その時の親の姿は、今まで一度も負けたことのない一番人気の馬に多額の掛け金をつぎ込んだ時のような気持だったのかもしれません。そして「マケタ」。その時の馬に「ヨクヤッタ」と、声をかけるでしょうか。どの馬も懸命に疾走しています。走ることに手抜きなどしているはずがありません。

競走馬は、勝つことを目的として調教されます。騎手がいてはじめて「全速力」を発揮します。では塾は、強靭な指導者がいてはじめて「成績向上」が生み出されるのでしょうか。

私は全く違うと思っています。馬には「こころ」がありません。物事の善し悪しを冷静に判断し、それに向かって力強く歩もうとする「意思」です。「ひと」には「こころ」があります。その「こころ」に力をみなぎらせる方法があります。それが『味方』になるということではないでしょうか。子がどんなに失敗しようが、どんなに負けようが、常に「こころ」をとなりに置いて見守ってあげる・・・。子がふと傍らを見ると、そこにはいつものお母さんがいた。いつものお父さんがいた。大安心を手に入れ、子はまた歩もうとする。その時に生まれるものが信頼という「こころ」です。「ありがとう」の心です。「ぼくにはこんなにも力強い味方がいてくれる・・・よしっ、歩こう！」

子のすべてを受け入れること。大海原のようにすべてを受け入れる。大変なことだと思います。しかしご両親はすでにお子さんから最大のプレゼントをいただいているはずです。そのプレゼントに「お礼」はつきものです。プレゼントとは・・・「笑顔」です。どんなに高額な代償をはらっても我が子のつくる笑顔は買えません。そのお礼をやがて子が巣立つ時までしつづけるべきだと思います。

なぜならお子さんが学校へ行かれている時でも「味方」として傍らにいてあげれば、お子さんは生まれたときに見せてくれた「笑顔」を変えることなく注ぎ続けてくれると思います。「そうか、ダメだったか。まっ、これも人生のクスリとして味わっておこうか。これからの人生にきっと役立つ何かをもらったということでいいんじゃん・・・。」ニコッ！「おとうさん、おかあさん、いつもありがとう」

私はここへ通う子たちの「こころ」をいつも見つめようとつとめています。その中に見えるのがお父さん、お母さんに敬いの念をどのくらい抱いているのか。信頼は・・・？

子は親から叱られることが一番つらいことだと私は思っています。いつも「叱られないように」と思いながら生活しています。この「叱られないように」という心理だけで長論文が出来上がってしまうくらい、この語彙は厄介者です。

精一杯がんばったのに叱られる・・・この時の孤独感・・・。私はこの子の傍らに居つづけたいと思います。

子にとっての最も残酷な状態は、「ひとりぼっち」です。いつもいつもそっと「こころの手」をにぎってあげてください。親の「欲」はそのまま子への「毒」と変化いたします。成績が下がることを望む子などいるはずがありません。

教育現場に「成績」という毒素がある限り応援者はなくなりません。すべての親が味方であることを・・・。